堺市舳松南高田遺跡
発掘調査報告書

1983年9月

平安博物館

例　言

1．本書は，堺市陵西通29-1，27-2所在の舳松南高田遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は平安博物館が株式会社高島屋の依頼によって，1981年9月1日から10月3日までの間に実施したものである。

3．発掘は高島屋堺店配送センターの建築に先立って実施されたものである。

4．調査は，平安博物館考古学第1研究室室長代理・故岩本義雄氏が責任者として担当したものであったが，氏が昨年急逝されたため，整理，報告書の刊行を同室の鈴木忠司がひきついで行なったものである。

5．報告書の執筆分担は下記のとおりである。

伊藤　潔（京都市埋蔵文化財研究所）

第Ⅱ章，第Ⅲ章，第Ⅴ章

森下浩行（同志社大学学生）・伊藤　潔

第Ⅳ章第1節，第2節1．

鈴木忠司（平安博物館考古第1研究室）

第Ⅰ章，第Ⅳ章第2節2，あとがき

6．本書の編集は鈴木が行ったが，伊藤　潔氏，川西宏幸両氏（平安博物館第3研究室）に全般的な指導・通覧をうけた。

7．実測．トレース，写真撮影などは，鈴木，森下，水口　薫（平安博物館研究部技術室），山尾典子が行なった。

8．註は巻末に一括して示した。

9．図中に使用した方位・座標は平面直角座標系Ⅵによる。測量は,国際航業株式会社による。

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経過……1

第Ⅱ章　位置と環境 ……1

第1節　位　　置

第2節　歴史的環境

1. 縄文時代
2. 弥生時代
3. 古墳時代
4. 奈良時代以降

第Ⅲ章　遺　　構 ……4

第1節　調査概要

第2節　層　　位

第3節　遺　　構

1. 古墳時代中期の遺構
2. 近世の遺構

第Ⅳ章　遺　　物 ……10

第1節　土　　器

1. 土 師 器
2. 須 恵 器
3. 埴　　輪

第2節　玉 類 他

1. 滑石製臼玉
2. 礫

第Ⅴ章　結　　語 ……14

あ と が き……16

註 ……17

図　　版

第Ⅰ章　調査に至る経過

昭和56年春，堺市陵西通りの遺跡所在地に，株式会社高島屋堺店配達所の建設が計画された。当地は，周知の遺跡であり，昭和56年5月，堺市教育委員会によって実施された試掘調査によって，古墳時代の遺構と多くの遺物が検出されていたために正式調査が求められた。このような経過で当該地の調査依頼が平安博物館に対してなされることとなった。

7月，高島屋側の依頼を受け入れ，8月，契約を締結し，9月1日より調査を実施することとなった。

調査は，平安博物館考古学第1研究室室長代理岩本義雄が担当することとし，副主任として京都市埋蔵文化財研究所伊藤潔氏に参加いただき指導を仰ぐこととなった。

10月3日ほぼ当初の予定どおりにすべての調査を終了した。（鈴木）

第Ⅱ章　位置と環境

第1節　位　　置

舳松南高田遺跡は堺市陵西通29-1，27-2にあり，仁徳陵古墳・履中陵古墳・にさんざい古墳の三大古墳をはじめとする百舌鳥古墳群の西側に営まれている（第1図）。

堺市南郊は地理的に丘陵，沖積・河谷平野，台地の3種に大別できる。丘陵は金剛山塊から北に派生した泉ケ丘丘陵・栂丘陵・光明池丘陵で現在泉北ニュータウンとなっている地域である。沖積・河谷平野は石津川の本・支流によって形成され，上流域は丘陵間に，中流域は台地の間などに狭少な河谷平野を形成し，下流域は泉ケ丘丘陵の北端に続き大阪湾に向って突出した形状を呈している。台地は石津川の支流百済川・美濃川によって西・南・北の3つの台地に区分できる。

この地形の発達のあとは，遺跡の分布や立地状況にも明白にあらわれている。

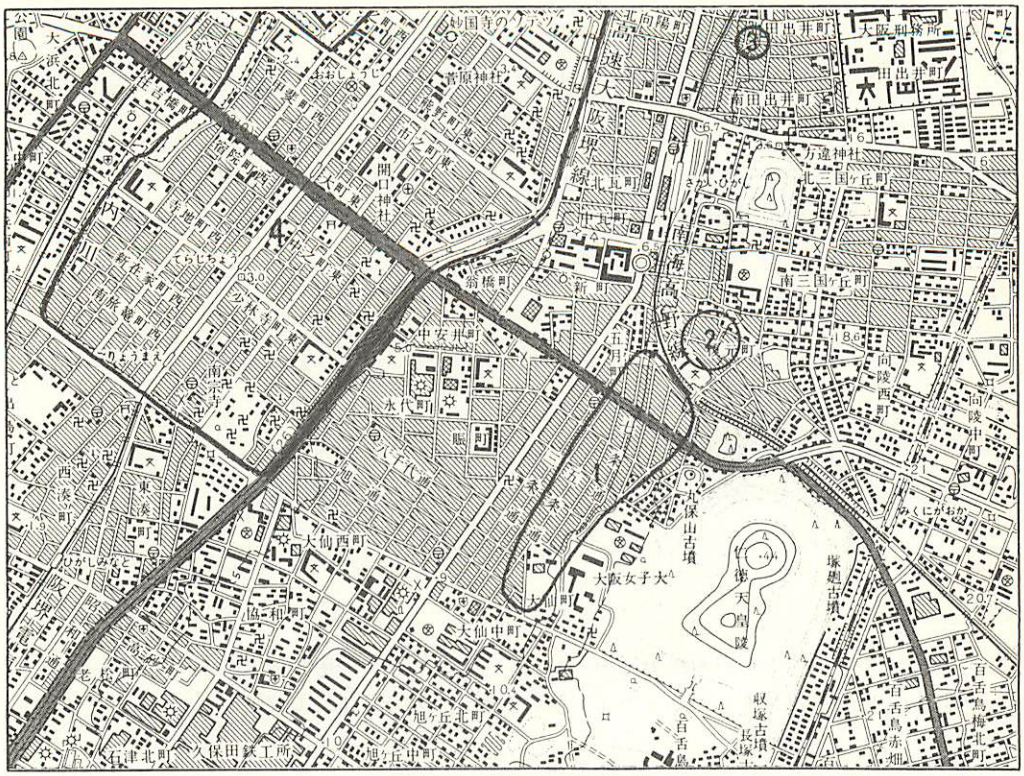
遺跡は大阪府文化財地名表に堺市[1]19-Yとして登録されている周知の遺跡である。遺跡の範囲は，北は市立榎小学校，南は御陵通，東は陵西通，西は三条通にまで及ぶ広大な面積を有する。

今回の調査地点は，南北に細長い舳松南高田遺跡内の北半部に位置し，仁徳陵古墳より西へ約350mの所に位置する（第2図，図版一）。

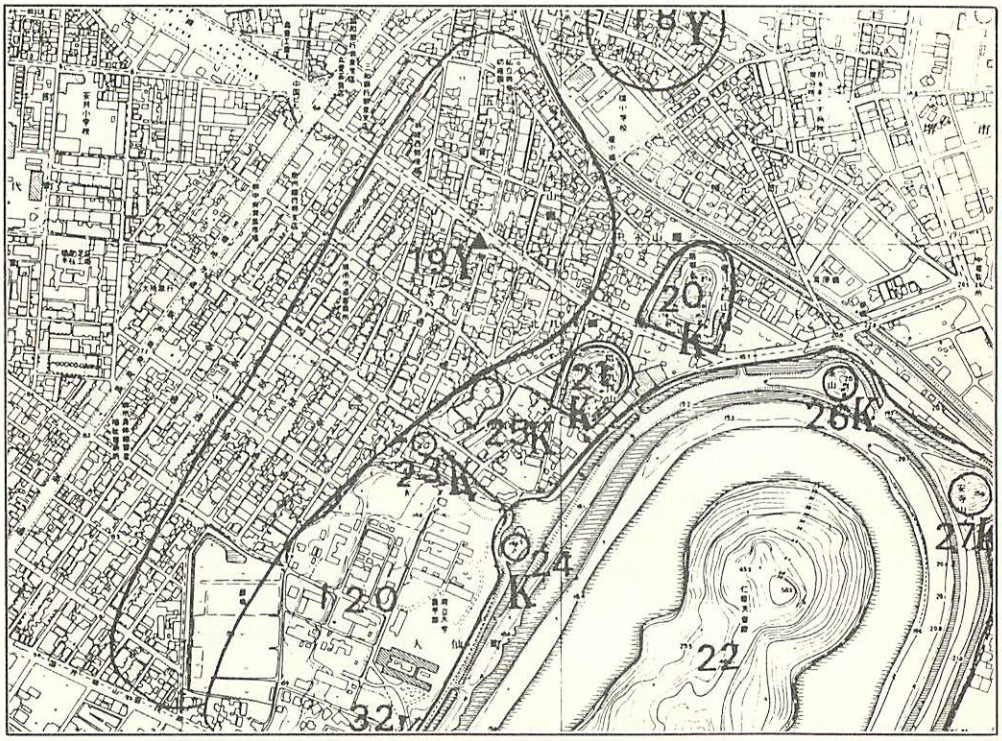
第2節　歴史的環境

堺は古来人々の生活の適地であり，各時代にわたって数多くの遺跡が存在する。特に本遺跡の周辺地域は早くから開けた地域である。

先土器時代の遺跡として，野々井遺跡より国府型ナイフ形石器・翼状剥片石核が発見されて



第1図　遺跡付近地形図
1 舳松南高田遺跡，2 三国ヶ岡遺跡，3 田出井町遺跡，4 環濠都市



第2図　舳松南高田遺跡の範囲(19Y)と調査地位置図(○印) 縮尺1万分の1

おり，人々の生活の営みを想起させるに充分である。

1．縄文時代

縄文時代の遺跡としては，南榎町遺跡・四ッ池遺跡・黄金砂丘遺跡などがある。南榎町遺跡は昭和23年市立工業高校考古学部員が偶然打製痕のある石屑を採集したことによって発見され，これを契機として石鏃・石匙等が採集された。土器は採集されなかったが，縄文時代中期に属するものと推定されている[2]。現在まで正式な発掘調査が行なわれていない為，遺跡の範囲や規模など詳細は不明である。四ッ池遺跡では縄文時代後～晩期，黄金砂丘遺跡では晩期の土器が出土している。百舌鳥本町ではサヌカイト製の有舌尖頭器が発見されている。

2．弥生時代

前期の遺跡としては，弥生時代全時期を通じ，一大集落を形成する四ッ池遺跡がある。他に鳳東町遺跡・浜寺元町遺跡・黄金山遺跡などがある。中・後期になると石津川流域では毛穴遺跡・石津遺跡・大阪湾沿岸地域では諏訪の森遺跡・黄金山遺跡・日明山遺跡などが出現する。百舌鳥の台地沿いには三国ケ丘遺跡（第２図-２）・田出井町遺跡（同図-３）・舳松南高田遺跡がある。三国ケ丘遺跡は大正13年に発見され，弥生土器片と共にサヌカイト製の石鏃・石鎗・石斧・緑泥岩の石庖丁・土錘・土製紡錘車が出土している[3]。田出井町遺跡は昭和２年宅地化によって発見された。弥生土器を伴ったサヌカイト製の石鏃が多数出土している[4]。

舳松南高田遺跡は昭和３年土地区画整理事業の際発見された。弥生土器とともに石鏃・石斧・土錘・土製紡錘車が出土しているが，前二者の遺跡に比較して遺物量は少ない[5]。また，昭和54年堺市教育委員会の調査[6]によって弥生時代前期の壷形土器底部が出土したが，遺構は確認されていない。

3．古墳時代

石津川流域には前代から続く石津遺跡があり，上流には初期須恵器・子持勾玉を出土した深田遺跡がある。台地域には，土師遺跡・阪南遺跡・舳松南高田遺跡・陵西遺跡などがある。

土師遺跡は，昭和49，50年の発掘調査[7]によってその存在と遺跡の重要性が知られ，その後数次にわたる調査により，５世紀中頃から６世紀前半のものと考えられる遺物を伴う住居址など多くの遺構が確認されており，百舌鳥古墳群造営に携った人々の集落跡であったのではないかと考えられている。

陵南遺跡は昭和49年の調査で，５世紀後半～6世紀前半の祭祀用品・武器・塩の生産をしたと考えられる古墳群築造に関連した工房跡が確認され，また昭和50年の調査[8]では，６世紀代の方形竪穴式住居址が17件検出されている。

舳松南高田遺跡からは，須恵器甕・杯・高杯・土師器杯・高杯・椀などとともに，馬・猪・鳥・武人・家屋などの象形埴輪や円筒埴輪が出土している。その出土状況から古墳に伴うものではなく，埴輪製作址と考えられている[9]。

陵西遺跡は調査地より南に位置する滑石製模造品製作跡である。昭和初年前田長三郎氏によって堺市陵西通四丁で管玉・同未完成品・石材片などが採集，発見された[10]。滑石製管玉製作に主

として用いられた陵西技法の遺跡として知られている。

百舌鳥梅町窯址でも百舌鳥古墳群に埴輪を供給したと考えられる窯跡が確認されている。また田出井町遺跡[11]では坩・金環・臼玉が，三国ケ岡遺跡[12]では，玉類・須恵器壷・高杯・椀などが発見されているが，いずれも古墳の破壊とともに発見されたものであろうとされている[13]。

また台地地域には，百舌鳥古墳群が築造される。その分布は，北部域台地には，仁徳陵・反正陵・御廟山・履中陵・イタスケ・乳の岡・長塚山などの前方後円墳，御廟山古墳の陪塚で，石製模造品を多量に出土したカトンボ山古墳，履中陵古墳の陪塚で，鉄製品を多く出土した七観山古墳，仁徳陵古墳の培塚で数百の滑石製小玉を出土した塚廻古墳などがある。南・西部台地には，にさんざい・コウジ山・赤山・平井塚・なげ塚・文珠塚などの前方後円墳が築造されている。また南方丘陵には，須恵器生産者との関連が考えられる後期の古墳群が分布する。

4.　奈良時代以降

奈良時代になると僧行基との関連から造寺された知識寺である家原寺・高蔵寺・大野寺などが周辺に分布している。平安・鎌倉時代では，美木多に放光寺とその瓦窯，正楽寺跡・赤畑遺跡などが確認されている。また条理制遺構が，美濃川・百済川の谷間，石津川本流と百済川の合流付近に特によく残存している。

また平安時代末には堺砂堆上に市が形成されはじめ，中世における堺港の交易，戦国時代には，その富力により，会合衆などの組織をもって自由都市と呼ばれる環濠都市（第2図―4）として発展する。

（伊藤）

第Ⅲ章　遺　　構

第1節　調査概要

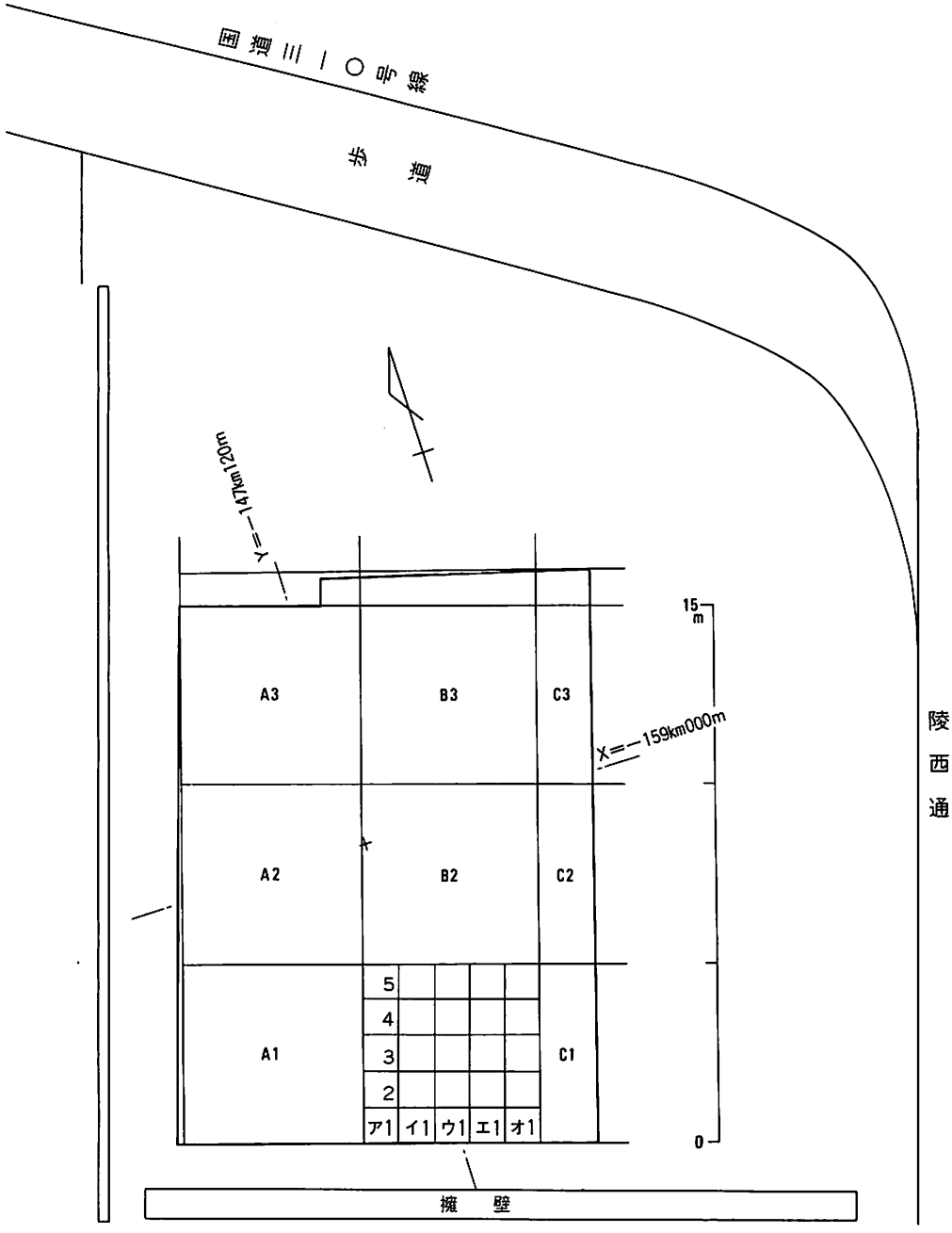
今回の調査は，堺市教育委員会の試掘調査により，古墳時代中期の竪穴式居住址床面と考えられる遺構が検出されたため，百舌鳥古墳群と同時期の集落と期待をもって発掘調査にあたった。

調査にあたっては，南北15m，東西11.5mの調査区を設定し，南北を南から5mごとに1・2・3区，東西を西から5mごとにA・B・C（1.5m）区で区画したグリッドを設け，さらに南北から1mごとに1・2・3・4・5区，東西を西から1mごとにア・イ・ウ・エ・オ区で区画した小グリッドを設定して調査を開始した（第3図）。

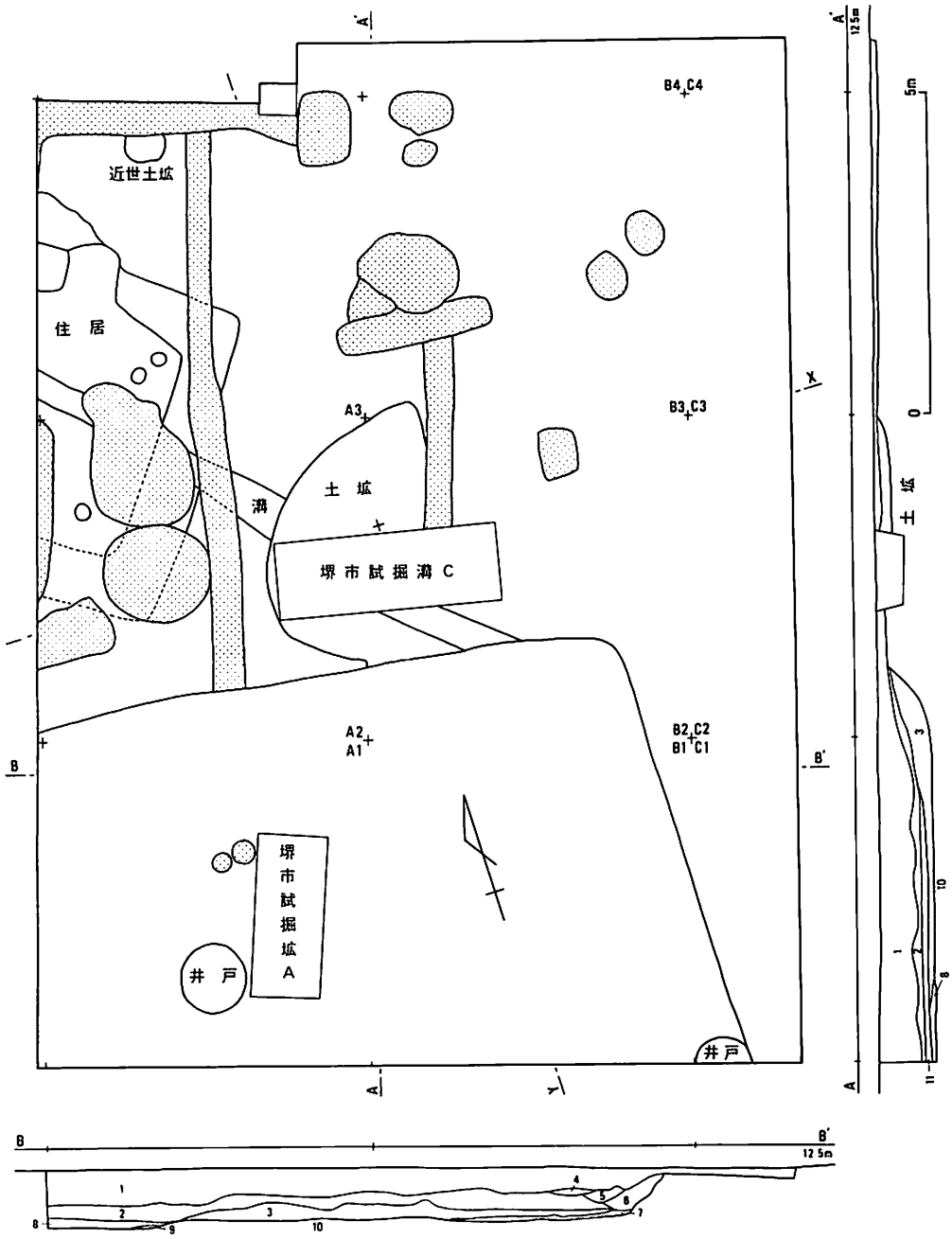
調査の結果，南半は近代の掘削により，東西10m以上，南北7m以上，深さ75cmの方形に削平されており，遺構は残っていない。現代の井戸が2基検出されたのみである。北半においても，野つぼ，住宅基礎などの為，撹乱削平をを受けており，遺構の遺存状態は非常に悪い。

今回の調査で検出された遺構は，古墳時代中期の住居壙1軒，溝1条，土壙1基，近世の土壙1基であった（第4図，図版二）。

調査区北西部（A-3区）で検出した住居址からは，土師器・須恵器とともに臼玉・滑石剥片・


国道三一〇号線
歩道
Y=−147km120m
X=−159km000m
15m
0
A3
B3
C3
A2
B2
C2
A1
C1
5
4
3
2
ア1
イ1
ウ1
エ1
オ1
擁壁
陵西通

第3図　発掘区画図


近世土坑
住　居
溝
土　坑
堺市試掘溝C
堺市試掘坑A
井　戸
井戸
A3
A2
A1
B4 C4
B3 C3
B2 C2
B1 C1
A
A'
B
B'
X
Y
12.5m
5m
0
土坑

第4図　遺　構　全　体　図

屑片などが多量に出土した。また砂岩質の砥石の可能性のある礫も出土しており，畿内地方でほとんど発見されていない滑石製模造品製作遺跡[14]であることが確認できた。住居址の調査に関しては，遺構の性格上，全ての出土遺物に三次元の座標をとり，遺構を復元できるよう精査した。さらに堆積土は区ごとに分け水洗を行なった。

尚，試掘時に検出した住居址と思われる遺構は古墳時代中期の土壙状遺構であった（堺市試掘溝Ｃ）。

第２節　層　　位

調査前まで住宅として使用されていた為，現代層が10cmほど堆積している。その下は調査区北半ではすぐ黄褐色砂質土層の無遺物層となるが，南半では75cmほどの段があり，そこに住宅建設の為の盛土（南半の段を平坦に整地する為に北半の遺物包含層，無遺物層を削って埋めた土），耕土・床土・茶褐色粘質土層が堆積し，淡黄色砂質土層の無遺物層となる（第４図）。土層名は以下のごとくである。１：盛土，２：耕作土（黒褐色粘質土），３：灰褐色粘質土，４：黄褐色粘質土（地山ブロック），５：暗青褐色粘質土，６：淡黄褐色土，７：暗黄褐色粘質土，８：淡黄褐色粘質土，９：淡黄褐色砂質土，10：地山（含礫淡黄褐色砂質土），11：灰褐色粘質土。

尚盛土内より弥生土器・土師器・須恵器の細片が多く出土しており，調査地内に削平前は多くの遺構があったことが推測できる。

第３節　遺　　構

１．　古墳時代中期の遺構

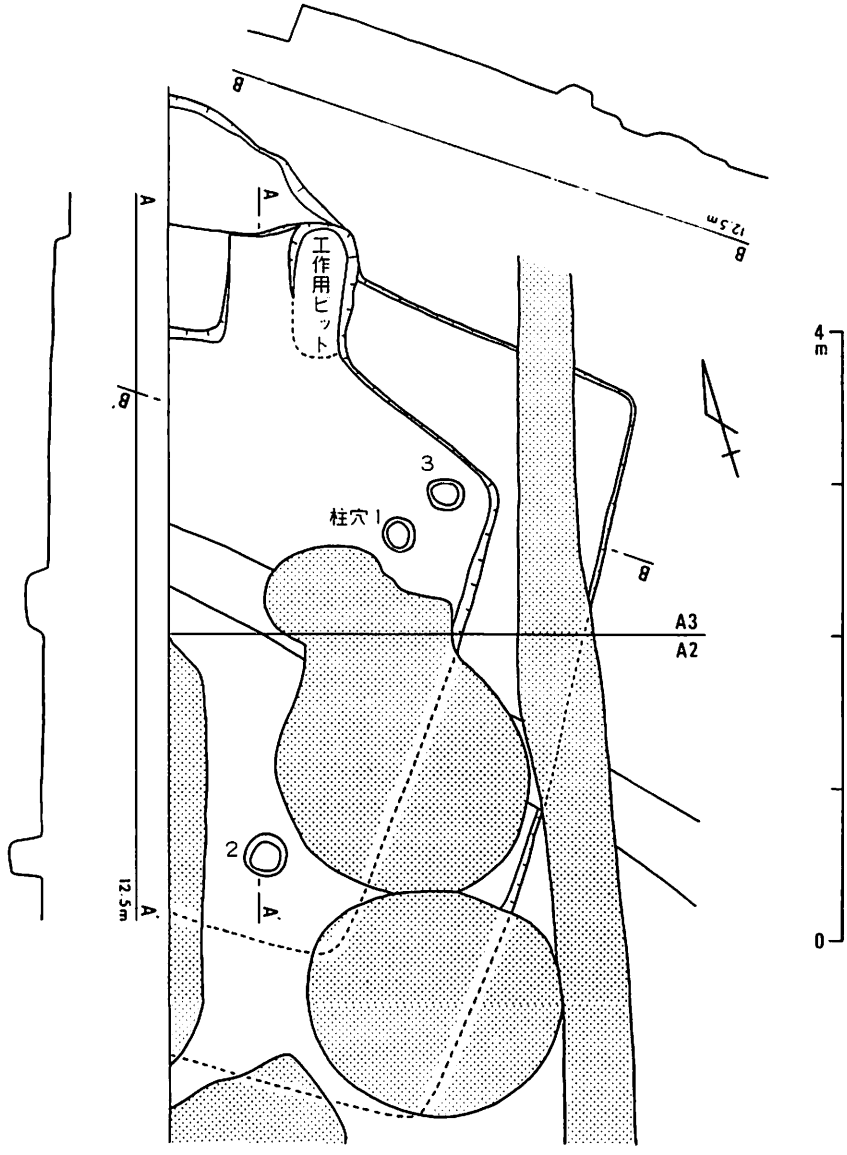
古墳時代中期の遺構としては住居址１軒・溝１条・土壙１基が検出された。

A. 住居址（第５図，図版三）

住居址はＡ２・３区でその一部を検出した。盛土を除去した黄褐色砂泥層（無遺物層）を掘り込んで黒褐色土層の隅丸方形状のラインが認められた。西半・南半は近・現代の撹乱の為全形は不明であるが，柱穴の位置などから一辺5.1m程の隅丸方形状の形態を呈するものと推定できるが，北辺中央部と推定できるところは張り出している。

床面から現存する壁高は，北壁で約15cmを残すが，東壁では12cm前後である。周溝は，検出されなかった。床面は二段になっている。壁面とほぼ平行に壁面より約70mの幅で約６cm内側の床より高くなっており，いわゆるベッド状を呈している。柱穴は２個検出したがいずれも一段低い床面にあり，直径20cm～25cmで深さ10cm～20cmを測る。両柱穴間の距離は2.3mである。北辺のほぼ中央部と推定できる位置には，ベッド状の部分をきり込み，北辺より張り出して，長軸90cm短軸40cm深さ15cmの隋円形を呈する工作用ピットと考えられる土壙を検出した。

住居址内からは，古墳時代中期の土師器・須恵器（図版四上段）と多量の滑石製臼玉・同未完成品・剥片・石屑が出土した。土器類は，柱穴１の西側に須恵器壺（第９図-12）・土師器甕（同図-１）が，工作用ピット内より土師器甕，イ2区床面直上より高杯（同図-５・10）が出土した。



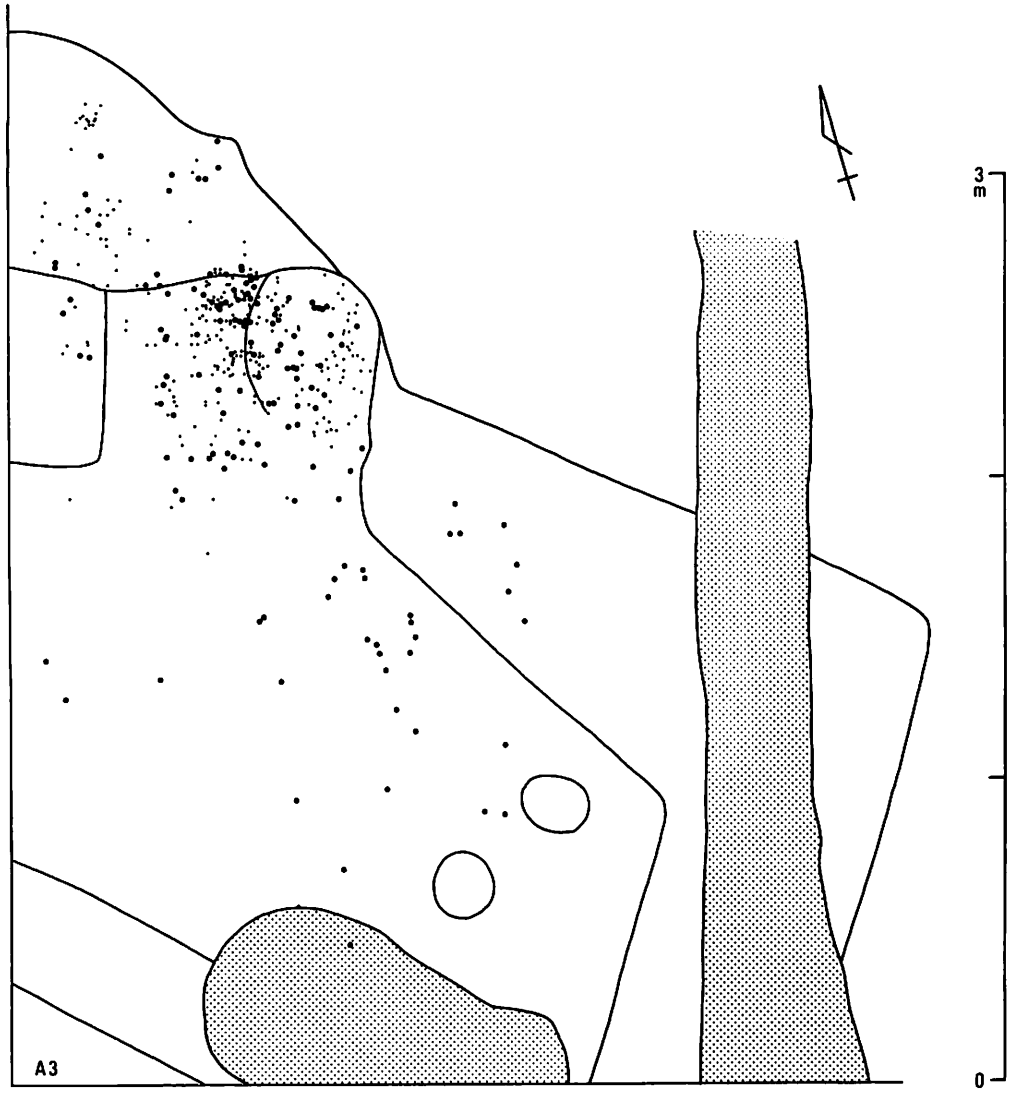
第5図　古墳時代住居址実測図

滑石製品及び剥片・石屑は住居址北半より出土しているが，工作用ピット内及び，その周辺に集中している（第6図）。

B. 溝　（第7図，図版四下段）

溝は調査区中央部を北西から南東方向に流れる。幅は60cm程度，深さは18cmを測る。埋土は黄灰色粘質土層と黒褐色砂質土層の2層に分層できる。上層にはほとんど遺物は含まれていなかったが，下層からは土師器高杯(第9図-7)・蛸壺形土器(同図-18)が出土した。

溝は調査区西側（A2区）では，住居址と切り合関係にあるが，その上部を撹乱されている為，

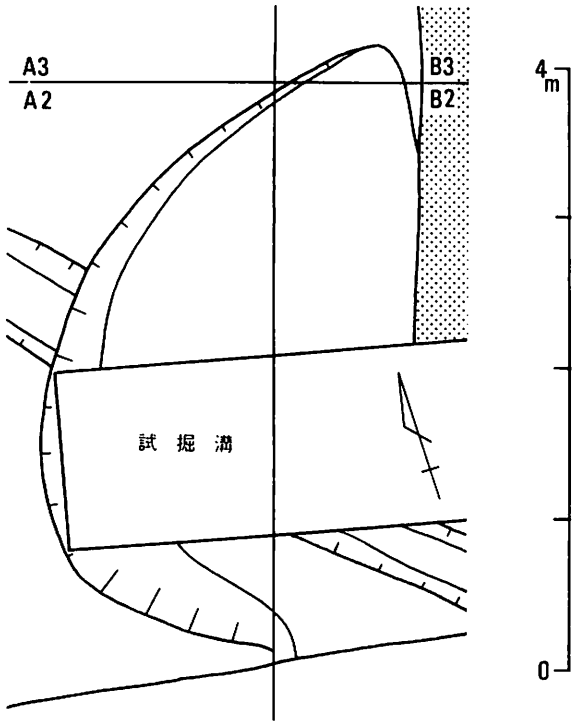


第6図　玉類出土位置図
大黒丸: 玉　小黒丸: 素材砕片

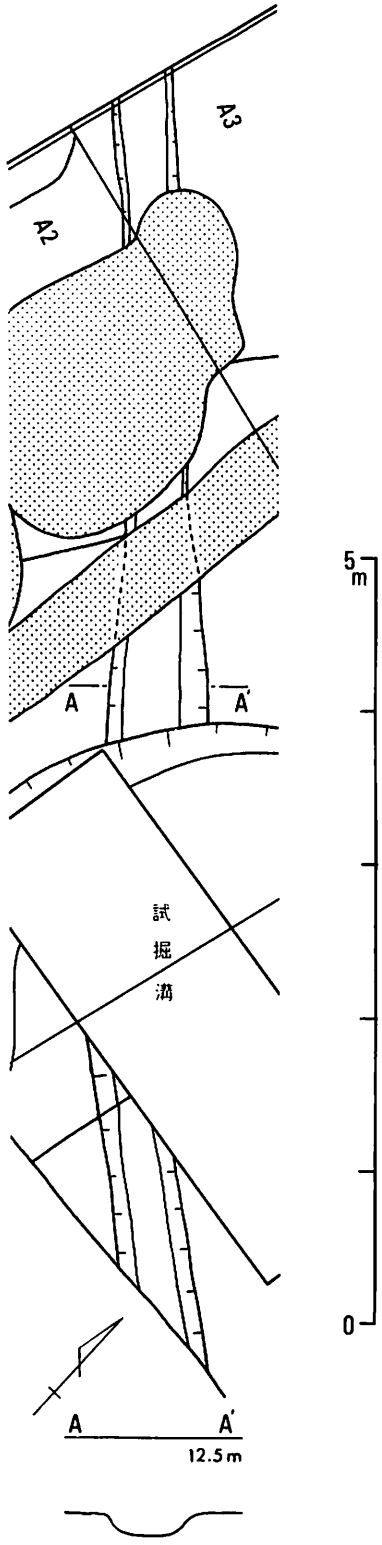
新旧関係は不明である。また，調査区東側（B2区）では，近代の大きな撹乱に切られているが，その延長線上（C1区）では検出されず，南～南西方向へ延びると考えられる。

C．土壙（第8図）

土壙は，調査区中央部で検出された。ほぼ中央部を試掘溝で，南端部を後世の段により撹乱されておりはっきりしないが，長軸4m以上・東西2.4mの不正円形を呈する。溝を切ってつくられている。埋土は，暗黄色褐色砂質土層で，円筒埴輪片（第9図-19）・須恵器杯蓋（第9図-13）などが出土した。



第7図　土　壙　実　測　図



第8図　溝　実　測　図

2．近世の遺構

近世の遺構としては，土壙1基を検出した。

A．土　　壙（第4図，図版一）

土壙は調査区北部A-3区で検出した。径65cmほどの円形を呈すると思われる。北半は撹乱を受けている。深さは35cmである。埋土は暗灰色土層であり，埋土内より近世の土師器皿が少量出土した。　　（伊藤）

第Ⅳ章　遺　　物

今回の調査で出土した遺物は，整理用コンテナにして7箱である。時代的には古墳時代及び中世～現代に属するが，遺構に伴うのは主に古墳時代のものである。そこで古墳時代の遺物のみ記すことにする。

古墳時代の遺物のうち接合，復合し図示できるのは，土師器12個体，須恵器6個体，埴輪1個体，滑石製臼玉503点を数える。

この他に管状土錘（中世?，4点），小型土師皿（近世，1点），銭（近世），陶磁器片，瓦片・鉄片・石片などがある。

第1節　土　　器

1．土　師　器

土師器は甕4個体，高杯6個体，甑1個体，飯蛸壺1個体を数える。そのほとんどが破片であり，その全形を知りうるものは少ない。全体に器体の遺存状態が悪く剥落が著しい。したがって，調整法の確認は一部にとどまる。

A. 甕（第9図-1～4）

甕はすべて住居址より検出した。全体を復元できるのは1のみであり，2・3・4は口縁部片である。形態はそれぞれ異なる。

1は，口径15.2cm・胴部最大径26.3cm・器高26.6cmを計る。口縁部は内彎し，端部に内傾する凹面をもつ。体部は球形をなす。外面は胴部に粗い斜方向の刷毛，更に肩部に細かい横方向の刷毛目調整を施す。底部は丸底である。底面は赤く焼けて煤が付着し，二次焼成の痕跡を明瞭に残す。類例として，大阪府船橋遺跡0-Ⅱ[15]，豊中遺跡A地区溝[16]，奈良県上ノ井手遺跡井戸上層[17]等の各出土品がある。布留式の新しい段階のものである。

2は，口縁部がかるく外反する。体部には肩の張りがほとんどなく，長胴をなすと思われる。外面には粗い斜方向の刷毛目が残り，煤の付着がある。

3は，口縁部が鋭く屈折して，端部内面に垂下状の肥厚を有する。

4は，口縁部が「く」の字に屈曲し，端部に外傾面をもつ。体部外面には煤が付着し，内面には指圧痕が残る（図版五上段1）。

B. 高杯（第9図-5～10）

5・8・9・は住居址，7は溝より出土した。

5は，大型高杯の杯部片である。平らな底部から外上方へ大きく開き，端部に至って外反する。

6・7は小型高杯の杯部片である。6は，ゆるやかに内彎する椀状を呈し，端部は直立する。7は，口縁部が軽く内彎気味に開く。底部と口縁部との間に段をもつ。内面には横方向の刷毛目および斜方向の刷毛目調整を施す。

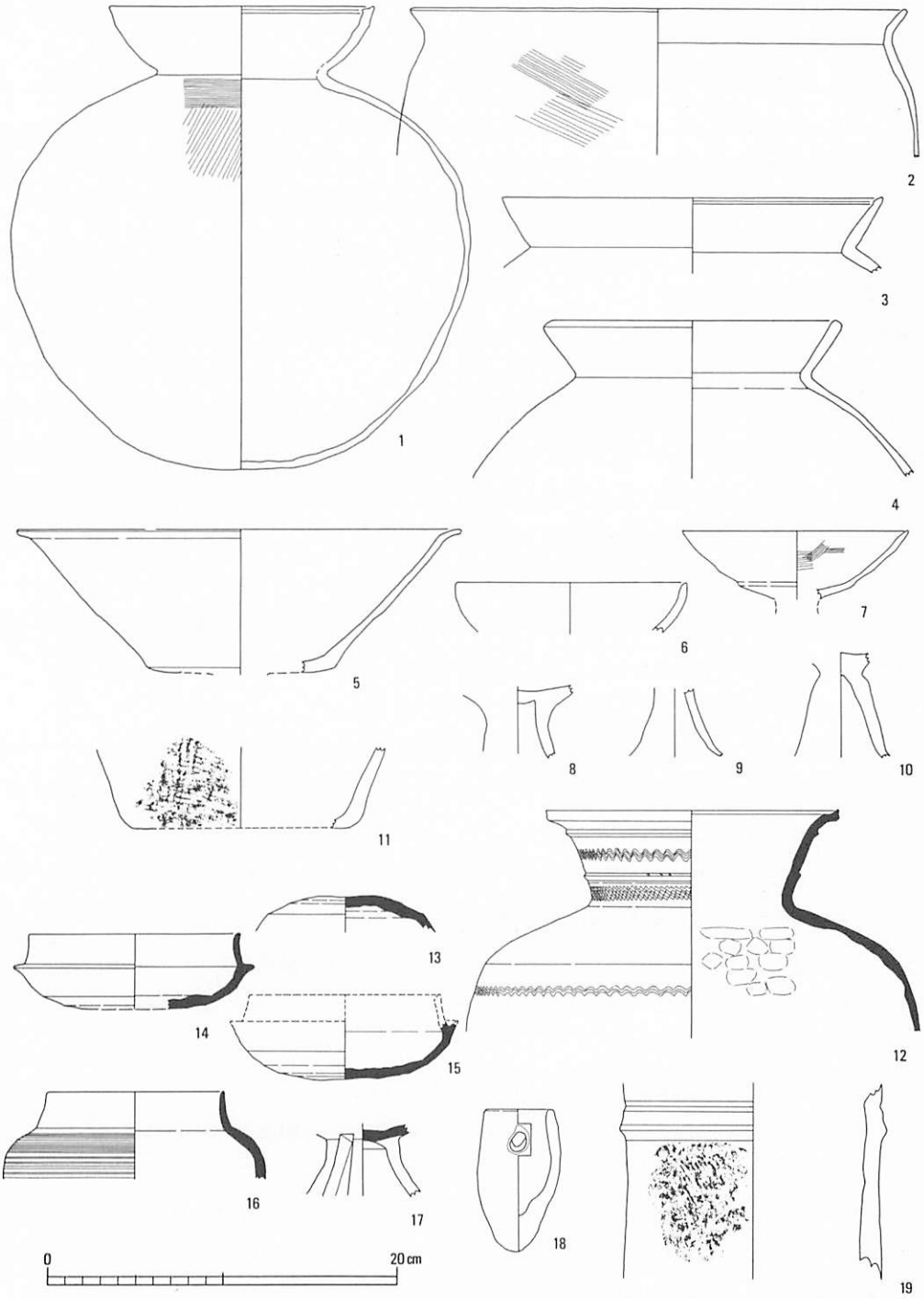
8（図版五上段2）・9・10（上段3）は小型高杯の脚部片である。
10は杯部との接合部が二段に凹んでいる。これは脚部成形手法の痕跡と考えられる。

C. 甑（第9図-11，図版五上段6）

住居址より出土した，いわゆる韓式系土器である。外面に格子状の叩き目痕を認める。遺存する体部はまっすぐ斜上方に伸びる。

D. 飯蛸壺（第9図-18，図版五上段9）

溝より1個体出土した。土師質で砲弾形を呈する。口縁部から底部まで緩い曲線を描き，尖底となる。焼成前に外面より一孔を穿つ。



第9図　土器・埴輪実測図

2.　須 恵 器

須恵器は，壺1点，蓋杯3点，高杯1点，短頸壺1点を数える。

なお，須恵器の編年は田辺編年[18]にしたがった。

A．壺（第9図-12，図版五上段4）

口縁部は外上方にのび，先端でさらに外反する。頸部には断面三角形の凸帯で区画されその間を櫛描波状文の文様帯を施す。下の凸帯には刻み目を加える。体部は肩が張り球状を呈す。肩部よりやや下方に1条（3本）の波状文が認められる。ただしこの波状文は半すり消しの状態である。内面は同心円状の当て具痕を残し，ヨコナデ調整を加えて消している。また同一個体と思われる底部の破片には平行叩き目及び格子状叩き目が見られる。形態手法の特徴などからTK216型式に比定されよう。5世期中頃～後半の年代を与えることができる。

B．蓋　杯（第9図-13～15）

13は口縁部が欠損している。天井部は丸味をもち，上面はやや凹状をなす。天井部のヘラ削りは約4／5に達する。

14・15は杯身である。14は口縁部が外反気味に直立する（図版五上段5）。体部はやや浅く，底部は平面をなす。底部のヘラ削りは約4／5ほどである。

C．短 頸 壺（第9図-16，図版五上段7）

口縁部はわずかに内傾して上方に伸び，端部はシャープにおさめる。なだらかな肩部にカキメ調整を施す。

D．高　杯（第9図-17，図版五上段8）

口縁部が欠損のため，全形は不明である。杯部内面に不定方向のナデを施す。脚部は外反して伸び，裾端部は段をなす。透しは長方形で三方向に有すると思われる。形態・手法の特徴から五世紀代後半の年代を与えることができよう。

3.　埴 輪（第9図-19，図版五上段10）

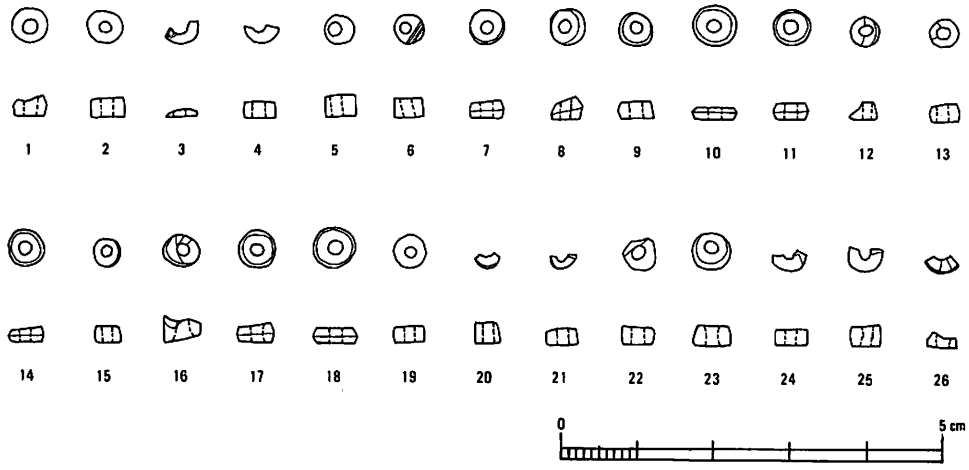
円筒埴輪片であり，土師質を呈する。凸帯は偏平な台形状をなし，横方向のナデで調整されている。外面には粗い刷毛目調整を施す。

第2節　玉　類　他

1.　滑石製臼玉（第10図，図版五下段左）

臼玉は住居址より502点が出土した。その内訳は，完成品26点・未完成品175点・破損品301点である。他に剥片が多量に出土している。これらのうち，完成品を図示した。材質は広義の滑石[19]であるが，緑泥片岩系であると思われる。

完成品は径5.3～3.4mm，厚さ3.5～1.6mm，孔径1.9～1.3mmを計り，色調は灰緑色を基本とする。ソロバン玉形のものと臼形のものとに大別できる。両者を比較すると，ソロバン玉形品は径が大きく薄いのに対し，臼形品は径が小さく厚い。ほとんどの完成品には周縁に研磨痕が残る。なお，穿孔が斜めのものもある（第1表）。



第10図　臼　玉　実　測　図

未完成品は製作工程により大きく三つに分けられる。

まず第一に，穿孔されていないもので，四～八角形をなす。両面には粗い研磨痕がみられる。第二に，穿孔工程のもので，これに片面穿孔品と両面穿孔品とがあり，いずれも未貫孔である。しかし両面穿孔品の数量は，はるかに少ない。第三に，貫通しているが，側面の調整を欠くものである。

破損品は，未完成品製作過程において破損したものである。破損時の工程によって，片面穿孔時のもの，両面穿孔時のもの，穿孔後のものの各種がある。しかし，未完成品同様に両面穿孔時のものは少ない。

なお，玉類に関する詳細は，稿を改めて記す予定である。

（森下・伊藤）

第1表　完成品臼玉一覧表

単位mm

	遺物番号	径	孔径	厚さ
1	E 1	4.5	1.9	2.0
2	E 16	4.3	1.4	2.4
3	E 39	4.5	1.6	—
4	E 48	4.0	1.8	2.3
5	E 67	3.9	1.4	3.0
6	E 72	3.7	1.6	2.6
7	E 82	4.5	1.3	2.3
8	E 84	4.6	1.9	3.0
9	E 87	4.4	1.7	2.2
10	E 88	5.3	1.9	1.6
11	E 89	4.5	1.9	2.0
12	E 90	3.9	1.5	2.0
13	E 97	4.0	1.6	2.5
14	E 99	4.7	1.5	1.9
15	E 108	3.4	1.4	2.2
16	E 127	4.9	1.9	3.5
17	E 147	4.9	1.7	2.3
18	E 153	5.1	1.5	2.0
19	E 155	4.2	1.5	2.2
20	E 204	—	—	2.6
21	E 205	4.0	1.5	2.3
22	E 218	4.1	1.8	2.1
23	E 229	4.8	1.8	2.5
24	E 232	4.7	1.3	2.1
25	E 251	4.7	1.6	2.8
26	E 305	—	1.8	—

2．礫（図版五下段右）

玉類とともに多くの礫が住居址内より出土している。石質は砂岩を主体にし，花崗岩が若干混じる（図版五下段右）。直径数cmから，最大で拳大の範囲の大きさの亜円礫である。いずれも明確な砥面を認めることはできないが，あるいは，玉研磨工程にかかわる砥石を含んでいるかもしれない。

（鈴木）

第V章　結　　語

調査の結果，古墳時代中期の住居址・溝・土壙を検出した。しかし後世の削平などをうけ，遺

存状態は悪い。今回検出した住居址内より，滑石製臼玉・同未成品・同破損品・剥片・石屑等が多量に出土した。また工作用ピットと考えられる土壙も検出した。畿内地方における玉作工房遺跡としては，大阪府八尾市の高安遺跡群[20]，大阪府堺市陵西通四丁の陵西遺跡，奈良県天理市の布留遺跡[21]などがあり[22]，当遺跡によって，畿内では数少ない滑石製模造品製作の工房址を加えたことになる。

高安遺跡（八尾市水越～千塚所在）は大正９年清原得巌氏によって発見された遺跡であり，弥生土器をはじめ土師器・須恵器とともに玉の原石・未成品・石製模造品などが採集されている。また昭和38年には碧玉の小剥片も採集され，滑石製品のみならず，碧玉その他の玉石を用いた玉類の製作を行なっていたことが確認された。高安遺跡は，遺跡東方にある式内社玉祖神社，あるいは『和名抄』にみられる高安郡玉祖郷との関連で考えられている。

前述した陵西遺跡においては，管玉９，同未成品４，平玉および臼玉７，石材69が採集されており，すべて滑石製である。

布留遺跡（天理市布留町，杣之内町，三島町，豊井町，豊田町，守目堂町所在）は，1938年以来多次にわたる調査によって，その存在と遺跡の重要性が知られている。1953～55年の布留（堂垣内）地区の調査で，古墳時代中期の祭祀場と考えられる敷石遺構が検出され，臼玉の入った土師器，有孔円板などが出土し，また杣之内木堂方地区の北端（布留地区寄り）　三島（里中）地区からも滑石製模造品が多数出土した。玉工房址は1977年度の調査で数ケ所検出された。布留（堂垣内）地区で碧玉製管玉工房址，三島（字堂ノ東，字堂ノ西）地区で碧玉製管玉・緑泥片岩製管玉・臼玉・有孔円板の工房址がそれぞれ検出された。これらの工房が営まれたのは，古墳時代中期後半を中心とする時期である。

古墳時代中期の玉工房址には，滑石製模造品のみを製作する「滑石製模造品製作遺跡」と，碧玉質等の玉類とともに滑石製模造品を製作する「玉作遺跡」とがあり[23]，滑石製模造品製作址は，古墳時代中期に出現するといわれている。当遺跡・陵西遺跡は，滑石製模造品製作址である。既知の滑石製模造品製作址においては，臼玉とともに剣形品・有孔円板・勾玉などを製作しているのが常であるが，当遺跡では，臼玉以外の器形は検出されておらず，臼玉のみを製作している。同類の遺跡を他に求めるなら，千葉県船橋市夏見所在の夏見台４号住居址[24]がある。このように，ある特定品目のみを製作する工房址について寺村光晴氏は，「他例からすれば必ずしも特定品目の製作のみとすることはできない」[25]と述べているけれども，特定品目だけを製作する工房の存在を予測しうるかもしれない。

臼玉の製作技法に関して椙山林継氏は，

（A）平板石に碁盤目状に直交する溝を刻み，各々の中央に穿孔し，板チョコレートのように割るもの。

（B）偏平長方形の細長い板材を次々と切断して，正方形の材をつくり，整形,穿孔するもの。

（C）板状の偏平石を原材とし，１個分ずつ割り出していくもの。

（D）管玉を切断するもの。

の4類に分類している[26]。

本遺跡における技法としては，暫定的な観察結果から，

1. 荒　割　り
2. 原材を偏平に研磨する
3. 側面を打ち割って多角形にする
4. 穿　孔
5. 側面研磨
6. 整形研磨仕上げ

という製作過程が考えられ，この技法は椙山林継氏分類の（C）に相当し，その内でも富山県下新川郡朝日町所在の浜山玉作1号址出土品[27]の技法に類似している。

当遺跡における臼玉の製作過程を以上のように想定してきたが，臼玉の製作技法は一様ではない。また臼玉の形態にも算盤玉形品・臼形品などがある。技法および形態の違いが，時間的な差によるものなのか，製作者に左右されるものなのか問題を残す。

舳松南高田遺跡は，百舌鳥古墳群内に位置する玉作工房址を伴なう古墳時代中期の集落遺跡である。玉作生産が古墳群内で行われており，しかも玉作工房の存続した時期は，百舌鳥古墳群の形成期のうちにある。百舌鳥古墳群内の御廟山古墳の陪塚であるカトンボ山古墳，仁徳陵古墳の陪塚である塚廻古墳などで，多量の滑石製臼玉をはじめ，多量の滑石製模造品が出土している。滑石製臼玉出土古墳が近傍に所存することからみて，製品は百舌鳥古墳群内に供給されたことが推測される。

百舌鳥古墳群内およびその周辺地域には，舳松南高田遺跡をはじめとして，陵西遺跡（玉類），土師遺跡（鉄），陵南遺跡（鉄・塩），百舌鳥梅町窯址群（埴輪），陶邑古窯址群（須恵器）などの工房の性格をもった集落,生産遺跡が営まれ，古墳群の形成期に活発な生産活動を行っていたことが知られる。

古墳社会時代にあって，これらの集団がどのような機構の中に位置づけられ，製品はどの様に流通したのか，今後の重要な課題となろう。（伊藤）

あ　と　が　き

本遺跡の発掘は，故岩本義雄氏（当時平安博物館考古第1研究室室長代理）が，調査主任となって調査を遂行されたものである。調査面積は決して広いものではなかったが，古墳時代の玉の工房址を検出しえたという点で，その成果は予期以上のものがあった。

このために，報告書刊行に向けての資料整理には，十二分の用意をもって臨むべく，準備が進められていた。ところが調査の翌年，1月7日岩本氏が急逝されることとなり，整理体制も暗礁に乗りあげる事態となった。この時点で，整理作業は同室の編者が受け継ぐことになったが，編者が現地に立っていないことや整理作業に専従できる体制になかったこともあり，いきおい整理分析作業は鈍らざるをえなかった。

しかしたがら，幸いにして副主任として調査にあたられた伊藤　潔氏（京都市埋蔵文化財研究所）の全面的な協力を仰ぐことができたことや，発掘参加者の一部に継続して整理にあたってい

ただくことができたおかげで，なんとか報告書の早期刊行にだけはこぎつけることができた。

しかしながら，本遺跡の最重要課題である玉類の分析に関するかぎりは，その検討を果すことが出来なかった。これらについては，この遺跡に限定した範囲内での考察にとどめず，広く古墳時代の玉造一般あるいは古墳時代全般の中でどのように位置づけられるか，広汎な問題点の詮索を意図していたので，生半可な記載をもって代えるよりも，この点に関してはひきつづき分析作業を続け，別途その全容を公けにするべきであり，これこそ故人の意に添うものであるという編者の一存によって，ここでの記載は，ほとんどその出土の事実の記載だけにとどめることにした。他日十分な検討の後にその責を果したいと考えている。

以上のような理由によって，この報告は，ひとまず調査結果の事実関係を報告するというところに目標を置いた。予期せぬ事態となったとはいえ，現場から整理作業まで多くの方々に御指導と御助力を賜ることができ，まがりなりにも報文の刊行にこぎつけることができた。

発掘に際しては，堺市教育委員会奥田豊氏，株式会社高島屋本社総務部神山博史・木村克彦・佐地隆司の各氏には，細心の御配慮をいただいた。発掘作業には別記の多くの方々の御参加をいただいた。また京都市埋蔵文化財研究所調査部長田辺昭三氏・平安博物館片岡肇・南博史両氏には，格別の御配慮をいただいた。また伊藤潔氏には，現場から執筆まで，ひと方ならぬ御助力を賜り作業遂行の原動力となっていただいた。これらの御指導御協力に対し，心よりお礼を申し上げる次第である。

はじめに記したような事情で，報告の内容あるいは，関係諸方面への配慮などについて不十分であったり，正確でなかったりすることも多々あろうかと思われる。これはひとえに編者の責に帰するものである。

最後にありし日の岩本氏を偲び，あらためて御冥福を祈りたい（第11図）。

発掘参加者氏名

伊藤　潔，横田　洋三，福士　順子，蓑輪淳子，山口　春夫，田村　尚美（ノートルダム女子大学），鋤柄　俊夫，長谷川久洋，田中　聡，森下　浩行，大島　春子，原真一，鈴木　信，寺内　正明（以上同志社大学），　水口　薫（平安博物館）

［順不問，敬称略］（鈴木）

第11図　現地説明中の岩本義雄氏

註

1．『大阪府文化財地名表』（大阪，1977）。
2．中西弘光「堺市南榎町の縄文遺跡」（『古代学研究』1所収，京都，1949）。
3．『堺市史』本編第1巻（堺，1930）。
4．註3に同じ。
5．同　上
6．石田修「舳松南高田遺跡発掘調査報告」（『堺市文化財調査報告』第7集所収，堺，1981）。
7．奥田豊『土師遺跡49年度発掘調査概要』（堺1975）。
8．中村浩『百舌鳥陵南町遺跡発掘調査報告』（大阪，1975）。
9．註3に同じ。

10. 寺村光晴『古代玉作の研究』(東京，吉川弘文館，1966)。
　尚，陵西遺跡は，舳松南高田遺跡内に含まれる可能性があるが，遺物採集地点等詳細が不明の為，従来通りの遺跡名称を使用した。
11. 註3に同じ。
12. 同　上
13. 『堺市史』続編第1巻(堺，1971)。
14. 寺村光晴氏は，滑石製模造品のみの製作遺跡を「滑石製品製作遺跡」，碧玉質等の玉類とともに製作を実施している遺跡を「玉作遺跡」と分類しており，それに従った。寺村光晴『古代玉作の研究』(東京，吉川弘文館，1966)。寺村光晴「祭祀遺物製作遺跡」(『神道考古学講座』第5巻所収，東京，雄山閣，1972)。
15. 田辺昭三・原口正三・田中琢他『河内船橋遺跡出土遺物の研究Ⅴ』(大阪，1962)。
16. 坂口昌男・吉川和則・酒井龍一他『豊中・古池遺跡発掘調査概報　そのⅢ』(和泉大津，1976)。
17. 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古代土師器」(「考古学雑誌」第60巻第2号所収，東京，1974)。
18. 田辺昭三『陶邑古窯趾群Ⅰ』(京都，1966)。
19. 従来滑石製品として一括されていたが，原材が鉱物学上の滑石を使用していないものが多い。森谷ひろみ「石製模造品の岩種について」(『千葉大学理学部紀要』第4巻第3号所収，千葉，1965)。
20. 『八尾市史』(八尾，1958)。「特輯清原得巌所蔵考古資料図録」(「大阪文化誌」第2巻第2号所収，大阪，1976)。
21. 末永雅雄・小林行雄・中村春寿「大和における土師器住居址の新例」(「考古学」第9巻第10号所収，大阪，1938)。布留遺跡範囲確認調査委員会『布留遺跡範囲確認調査報告書』(天理，1979)。置田雅昭「古墳時代手工業の一例……奈良県天理市布留遺跡に於ける玉作り……」(『日本民族文化とその周辺・考古篇』所収，山口，1980)。
22. 八尾市佐堂遺跡，奈良県曽我遺跡などがある。
23. 註10．に同じ。
24. 下津谷達男・西野元・平井考一・岡崎文喜『夏見台一古墳時代集落址・工房址の発掘調査』(東京・ニューサイエンス社，1968)。
25. 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』(東京，吉川弘文館，1980)。
26. 椙山林継「臼玉の未成品とその製作工程について」(『神坂峠』所収，長野県阿智村，1969)。
27. 大場磐雄・寺村光晴・小島俊彰・藤井昭二『はまやま』(富山県朝日町，1969)。

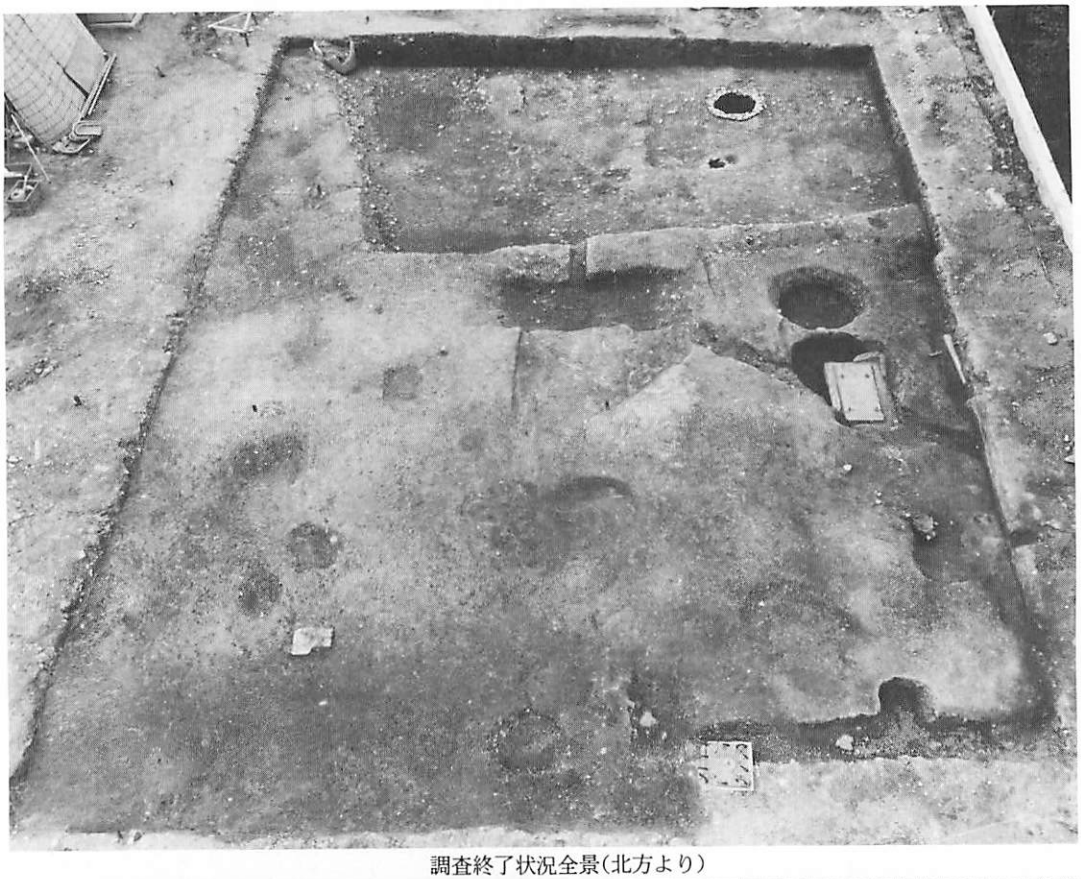
図　　版

図版一

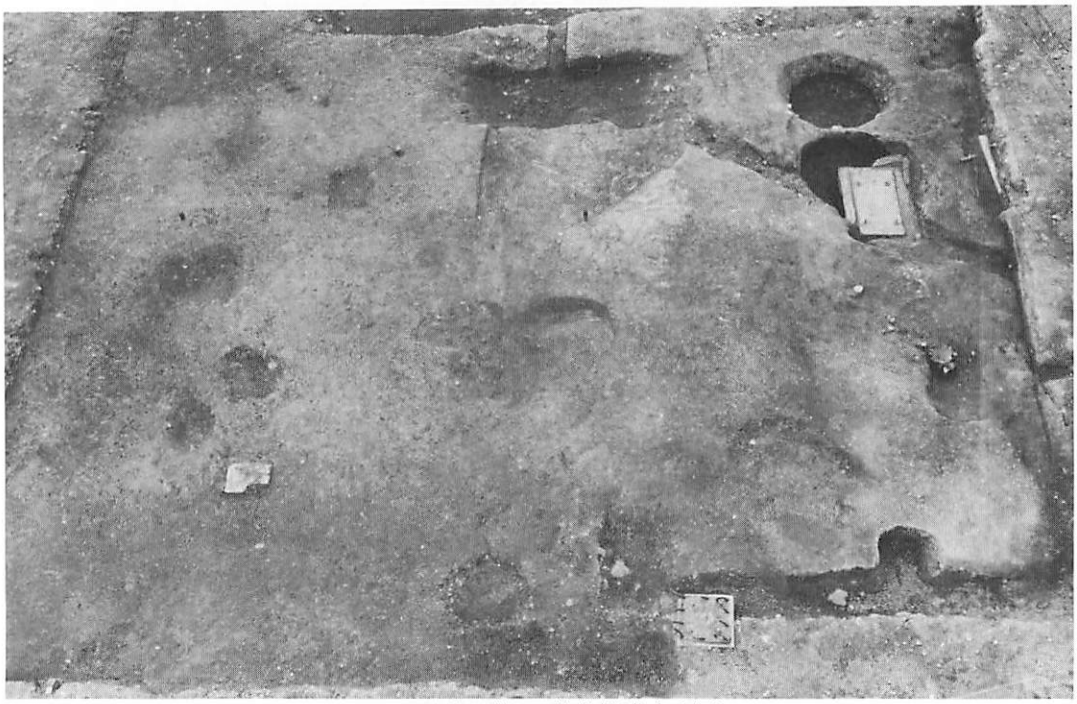
調査地遠景（空撮）

調査地遠景（北方より）

図版二



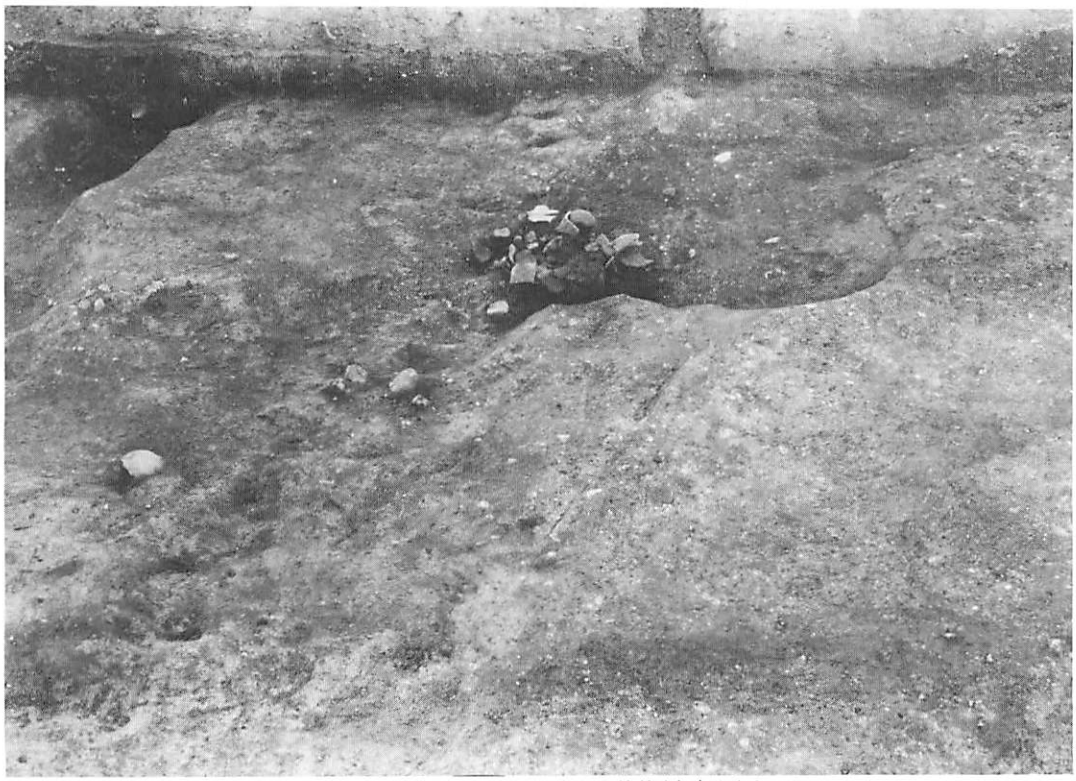
調査終了状況全景(北方より)



調査終了状況・北半部(北方より)

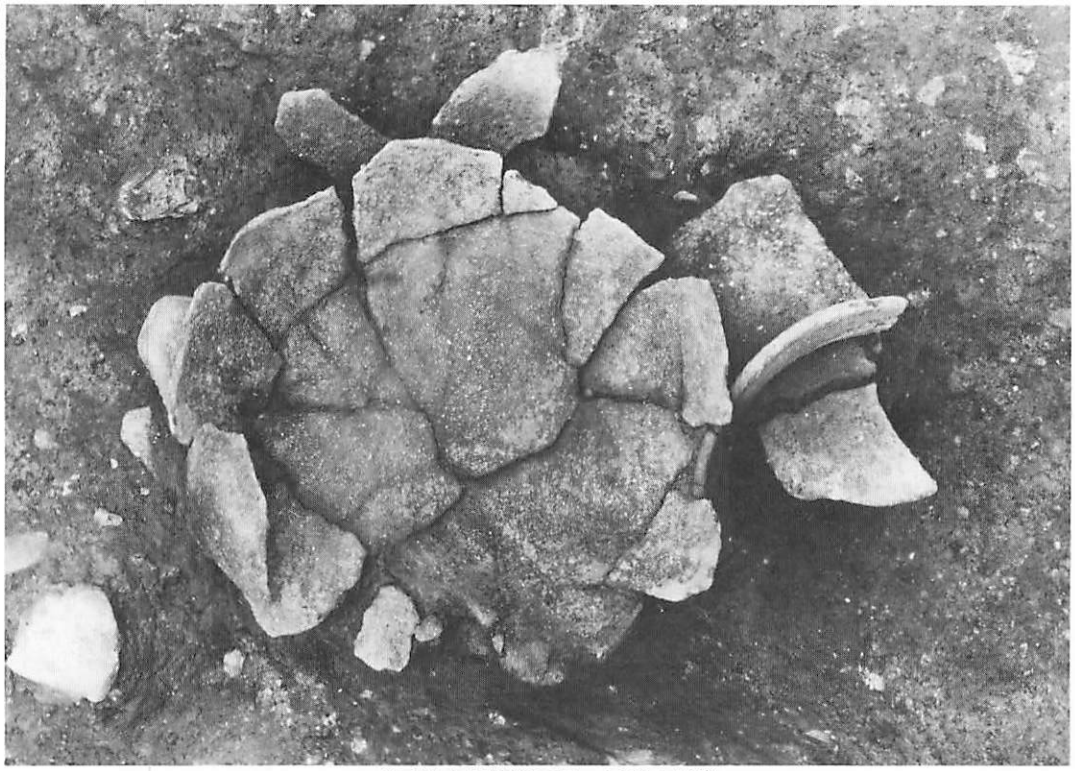
図版三

住居址および土器・礫出土状態(南方より)



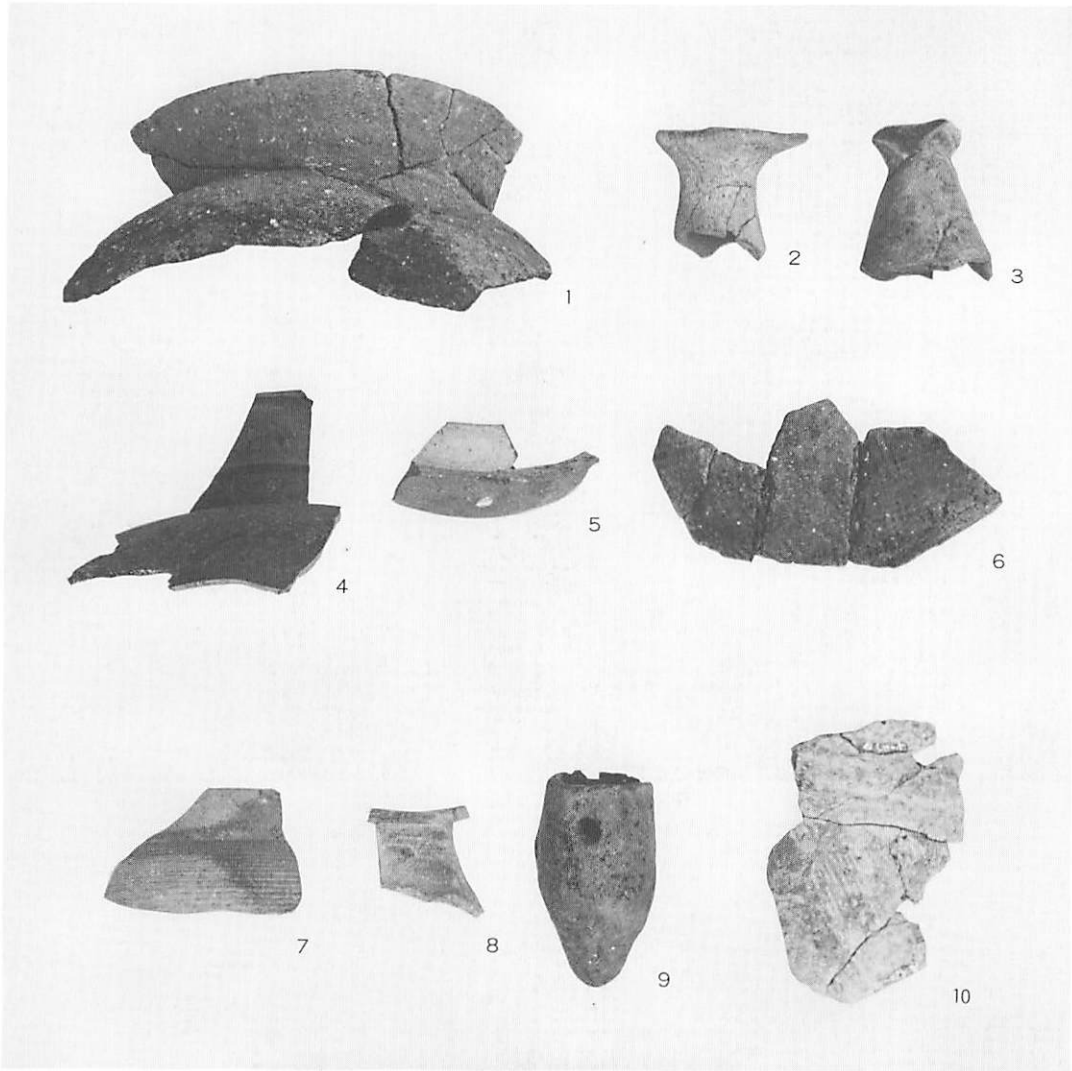
住居址および土器・礫出土状態(東方より)

図版四

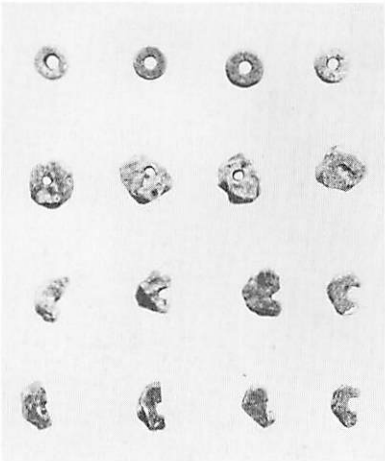


住居址内土器(第19図－１)出土状態

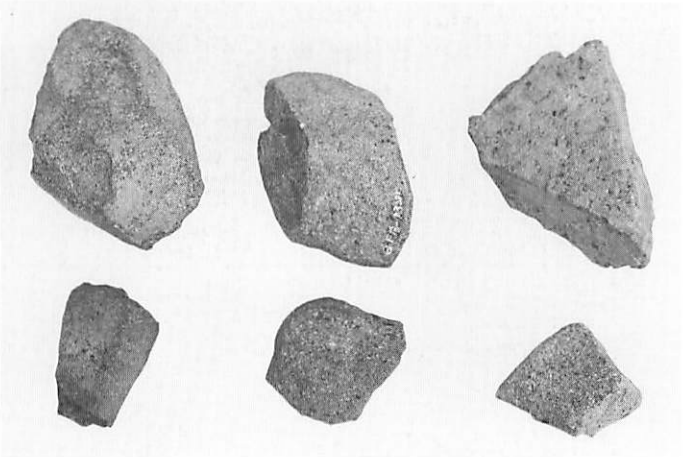
溝・蛸壷検出状態



土器・埴輪(縮尺1/3)



玉(縮尺1/2)



礫(縮尺1/3)

堺市舳松南高田遺跡発掘調査報告書

発行日　1983年9月20日

編　集　平安博物館考古学第一研究室
鈴　木　忠　司

発　行　平　安　博　物　館
604　京都市中京区三条高倉

制　作　ビ　ク　ト　リ　ー　社
604　京都市中京区油小路通錦上ル